

聞き取り困難児への補聴援助システムの適用とその効果

—主観的評価による検討—

○小渕千絵 笹目友香 佐々木香緒里 岩崎淳也 山本弥生

（国際医療福祉大学成田保健医療学部）

KEY WORDS: 聞き取り困難 補聴援助システム 主観的評価

（目的）

聴力は正常であるが、聞き取り困難がみられる場合、聴覚情報処理障害(APD)あるいは聞き取り困難(LiD)の症状がその背景にあると考えられる。聞き取り困難については、疾病概念の捉え方や用語の使用などに議論がみられるものの (de Wit et al, 2016; Moncrieff, 2017 など)、当事者が感じる主観的な困り感は強く、症状への適切な対応が必要であるといえる。最近では、国内でも聞き取り困難の認知は広がるようになり、聴覚特性を評価するための評価法(聴覚情報処理検査(APT), 2020)も、徐々に臨床上用いられるようになってきた。聞き取り困難への支援については、補聴援助システムや聴覚トレーニングの効果に関して、多数の報告はみられるが (Loo et al, 2016 など)、国内での実証的な報告は比較的少ない。

本研究では、発達上の顕著な遅れはみられないが聞き取りに強い困難を示す児に対し、補聴援助システムの試聴を行い、その効果について検討したので報告する。

（方法）

対象: 普通学級に在籍する 12 歳女児 1 名

聞き取り困難（「よく聞こえないことがある、騒がしいところでは相手の言っていることが聞き取れない」）を主訴として、精査や補聴に関する相談のために来学した。

聴覚検査: 聴力は、右耳 6.3dBHL、左耳 3.8dBHL であり、語音弁別能は、両耳とも 98%と、基本的な聴覚検査では低下がみられず、また耳鼻科医師による耳鏡検査でも問題がなかった。聴覚認知能力を精査するため、雑音下の文聴取検査(OLSA)を行ったところ、50%了解閾値が-6.2dB であり大きな低下はみられなかった。聴覚情報処理検査(APT, 学苑社)では、ギャップ検出閾値 4ms、早口音声聴取検査(2.0 倍速)82%、聴覚的注意検査 100%と大きな聴取能の低下はみられなかったが、複数音声下聴取検査 75%であり、複数音声混在する環境ではやや聴取困難がみられた。

発達検査: 9 歳時の WISC-IV では全検査 IQ 105 であり、知的な問題はみられなかった。AQ 日本語版では総合得点 18 点と ASD には該当せず、Conners3 の ADHD 指標確率も 11%と低かった。一方で、子どものコミュニケーション・チェックリスト (CCC-2) では、一般コミュニケーション能力(GCC)で 46 点、K-ABC II の評価点で表現語彙 6、理解語彙 7 と、言語・コミュニケーション能力での遅れがみられた。

補聴援助システム: Roger focus と Roger タッチスクリーンマイク(どちらも phonak 社製)を 2 週間貸し出した。使用方法を説明し、学校及び家庭で使用するよう促した。

補聴援助システム前後の評価: 短期的な言語・聴覚評価の変化は少ないと考え、補聴援助システムによる主観的な聴取能やコミュニケーションの変化について検討した。質問紙は、きこえの困難さチェックリスト (小川ら, 2013) を用いた。装用前に実施した結果と、装用 2 週間後に使用した結果について、総合得点、小川ら(2013)に基づく 4 要因の項目得点を比較した。

なお、本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会によって承認を受けて行った (承認番号 20-Io-32)。また、対象児

とその保護者には研究参加の同意を得た上で実施した。

（結果）

装用前における質問紙の総得点は、38 点であり、全般的に聞き取り困難が強いものと考えられた。Roger focus 装用後の総得点は 12 点で、聞き取り困難の程度は装用前の 1/3 程度まで改善した。各項目得点については (図 1)、全ての要因で改善を認めたが、特に語音の識別要因で改善が顕著であった。試聴印象は、「使っているとよく聞こえる」であり、最終的に本人の希望により購入に至った。

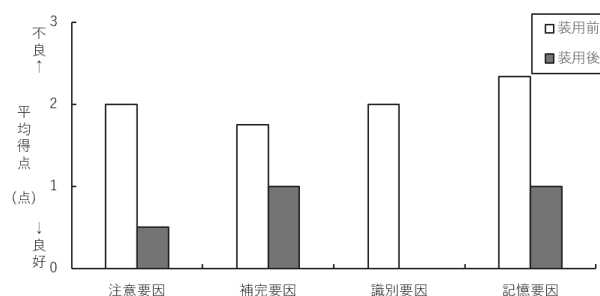


図 1 聞き取り困難児の補聴援助システム装用前後の項目ごとの得点

（考察）

今回の対象児においては、聴覚検査での成績低下は顕著ではないが、聞き取り困難の訴えが強くみられた。言語・コミュニケーション能力の遅れもあることから、言語習得を促進するための聴取環境の整備を考え、補聴援助システムの適用を行った。質問紙による主観的評価では、明確な改善がみられ、特に語音の識別がしやすくなる効果がみられた。評価前より聞き取り困難の症状で悩み、本人自ら補聴機器の装用について希望していたことも装用後の満足度に影響した可能性はある。

本例に対しては、補聴援助システムの活用だけでなく、遅れがみられる語彙獲得の促進などを図ることで、聞き取り能力の向上にもつながる可能性がある。家庭での学習方法に関する提案が生活の中で実行されているかを確認するなど、今後も支援の継続が必要と考えられた。

（文献）

- 1) de Wit E, Visser-Bochane M, Steenbergen B, van Dijk P, van der Schans CP, Luinge MR: Characteristics of auditory processing disorders: A systematic review. J Speech Lang Hear Res 59: 384-413, 2016.
- 2) Moncrieff D: Response to de Wit et al., 2016, “Characteristics of auditory processing disorders: A systematic review”. J Speech Lang Hear Res 60:1448-1450, 2017.
- 3) 加我君孝 (監) 小渕千絵・原島恒夫ら (編著) 聴覚情報処理検査 (APT) マニュアル. 学苑社, 2020.
- 4) Loo JH, Rosen S, Bamiou DE: Auditory training effects on the listening skills of children with auditory processing disorder. Ear Hear 37: 38-47, 2016.

(OBUCHI Chie, SASAME Yuka, SASAKI Kaori, IWASAKI Junya, YAMAMOTO Yayoi)